様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１４０２２

研究課題名（和文）国際的な学習活動における高大接続の進展に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Research on enhancing the connection between high school and university in international learning activities

研究代表者
新見　有紀子（Shimmi, Yukiko）

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：９０７４７３９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、大学入学以前の国際的な学習活動と、大学入学以降の留学との関連性を分析することによって、高大を通じたグローバル人材育成への示唆を得ることを目的として行われた。近年の課題を踏まえ、本研究では、特に長期留学の促進策の提言に向けた分析を行った。質問紙調査からは、大学入学前の国際的な学習活動の中でも、海外研修を経験した者は、大学入学以降の初めての留学で、比較的長期の留学を行う傾向にあることが明らかになった。インタビュー調査からは、過去の海外経験を含む学生自身に関する要因と、海外志向を持つ家族・友人・知人の存在が、比較的長期の留学の動機づけに影響を与えることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究から、大学入学以前の海外研修への参加が大学入学以降の長期留学の促進に資する可能性や、長期留学前に、学生自身に関する要因として、過去の海外経験や異文化接触経験、留学に関する興味や価値の認識、性格的特性の保有に加え、周囲の関係者の要因として、家族・友人・知人等に国際経験や志向を持つ者がいることにより、大学入学以降の比較的長期の留学の促進しうる可能性が示唆された。この成果は、グローバル人材育成を効果的に育成していくための基礎的な資料となり、日本の政府や教育機関において進められているグローバル人材の育成に、国際的な学習活動や留学を促進するという観点から貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to analyze the relationship between international learning activities prior to entering university and the participation in study abroad programs after entering university, in order to educate students with global competence by considering the connectivity between before and after entering university. This study analyzed the relationship between international learning activities and long-term study abroad. The survey revealed that among international learning activities prior to entering university, those who had attended a short study abroad program tended to study abroad for a relatively long period after entering university. The interview analysis suggested that factors related to the students themselves, including past overseas experience, and the presence of family, friends, and acquaintances with an international orientation influence their motivation to study abroad for relatively long periods of time.

研究分野：異文化間教育、国際教育

キーワード：国際的な学習活動　高大接続・連携　SGH　海外留学　内なる国際化　グローバル人材

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

グローバル化し、変化の激しい現代社会で生きる力を獲得する上で、海外留学は、最も効果の高い学びの機会の一つである（Kuh 他、 2013）。全世界の高等教育段階の留学生数は、コロナ禍前の 2016 年度に、500 万人を超えた（OECD、 2018）。米国や豪州では、国家戦略として海外留学を「すべての学生が一度は経験すべき必須の活動」と位置付け、海外留学を促進している。日本でも、海外留学の促進が進められているが、大学生のうち留学経験者はわずか 3%に留まっている（文部科学省、 2018）。近年、日本の大学在籍中の留学者の大多数は、1ヶ月未満の留学となっており（日本学生支援機構，2018）、中・長期留学の促進も課題となっている。

先行研究では、日本の大学生の留学を阻害する主な要因として、留学で必要とされる語学力の習得、留学資金の準備、留学時期の調整・検討といった、長期的な視点で対応を要する問題が指摘されている。これらの問題に、大学入学後から対応するだけでは限界がある。その一方で、近年、大学だけでなく高校などの大学入学以前の段階においても、留学や研修といった海外における活動を含む国際的な学習活動が広がっている。大学入学以前の国際的な学びを通じて、大学以降の海外留学の意欲を高め、準備を促すことができる可能性が示唆されるものの、具体的にどのような介入が、大学留学を促進しうるのかについての検証や実践は進んでいない。

２．研究の目的

本研究の目的は、大学入学以前の国際的な学習経験と、大学での留学との関連性を明らかにすることによって、国際的な学習活動に関する教育の接続を進展させるとともに、海外留学の質と量を向上させ、次世代のグローバル人材育成に資することである。

３．研究の方法

（１）質問紙調査

高校卒業後国内の大学に進学した者で、大学での留学経験者に対する質問紙調査を行った。大学入学以前の段階のいかなる国際的な学習活動が、大学からの留学の参加にどのように影響したのかについて分析した。

（２）インタビュー調査

質問紙調査と同様の対象者に対し、インタビュー調査を実施し、質問紙調査で得られた結果の背景を探った。大学入学以前のいかなる国際的な学習経験が、なぜ・どのように大学での留学参加に、影響したのか（否か）を中心にデータ収集した。分析を通じて、大学での留学促進に影響しうる、大学入学以前の国際的な学習活動と経験について探索した。

４．研究成果

（１）質問紙調査の分析結果

新見（2022a）では、290 件分のアンケート結果の分析を報告した。この際、特に中・長期留学の促進策の提言に向けた分析を行うため、学部在籍中の中・長期留学（半年から 2 年未満）と近年急速に増加した超短期留学（8 日以上 1ヶ月未満）のカテゴリ別で、大学入学以前の海外経験と高校時代の海外とつながりのある友人関係についての比較を行った。

研究課題　1 として「どのような大学入学以前の経験を持つ学生が、学部在籍中に中・長期留学に参加しているのか」を設定し、高校時代までの海外経験、高校時代の友人関係の項目群別で、大学入学以降の初めての留学期間別のカテゴリでクロス集計を行い、カイ 2 乗検定と Fisher の正確確率検定を用いて割合の比較を行った。分析の結果、大学入学以降の初めての留学期間が中・長期の者は、大学入学以前に海外研修、高校での留学生の受入れ経験を有する者の割合が有意に大きかったことが明らかになった。

研究課題 2 として、「大学入学以前のどのような経験が、学部在籍中の中・長期留学と関連があるのか」を設定し、大学入学以降の初めての留学期間別のカテゴリでロジスティック回帰分析を行った。複数の変数の影響を考慮した分析の結果、年齢 20 歳以上と、大学入学以前の海外研修の項目が、投入した場合の全てのモデルで有意となった。年齢については、大学からの中・長期留学は一般的に高学年で参加傾向にあるという点と整合的である。過去の経験に関しては、大学以降の初めての留学期間が中・長期の者は、大学における超短期留学に類似すると見られる海外研修を大学入学以前に経験することで、大学入学後の中・長期留学への直接の参加を促進する可能性を読み取ることができる。さらに、今回のモデルのうち海外経験・友人関係の一部を考慮したモデルが最も当てはまりの良いものとなった。この結果から、大学における中・長期留学への影響要因を考える上では、海外経験だけでなく、友人関係も併せて考慮することで、その影響をより適切に説明できる可能性が示唆された。

以上、質問紙調査の分析結果をまとめると、大学入学前の海外研修により、大学在学中の中・長期の留学への参加を促進できる可能性と、海外経験に加え、友人関係も併せて考慮することで中・長期留学の影響をより適切に説明ができる可能性が示唆され、友人関係等についてはインタ

ビュー等を通じて詳細な分析を行うことが今後の課題として浮かび上がった。

（２）インタビュー調査の分析結果

新見（2022b）では、学部での半年以上の留学の経験者と内定者（コロナ禍による早期帰国者・辞退者を含む）35 名のインタビューの分析結果を報告した。オンラインによる一対一の半構造化インタビューを 60-100 分程度行った。文字起こしの後のデータについて、交換留学に関連のある大学入学以前の要因として、先行文献を参考に、学生自身や、親・友人等の周囲の要因に着目し、コードの付与とカテゴリ化を行ったところ、以下のテーマが浮かび上がった。

①　学生自身に関する要因

・過去の海外経験

自身に過去の海外渡航経験（海外旅行、海外研修、中・長期留学、海外在住など）がある場合、そのような経験が、海外文化や外国語への興味を深め、海外環境への抵抗感を低減し、大学以降での中・長期留学の留学志向に影響を与えていた。

・留学に関連した興味や価値の認識

インタビュー対象者は、海外文化や生活への興味、外国語の有用性の認識、専門の学習の必要性など、中・長期留学により充足や獲得が期待される経験、知識等の価値を認識しており、それらが中・長期留学志向に繋がっていた。

・性格的特性：好奇心旺盛、行動力、向上心

特に、周囲に海外経験を持つ者が限られる場合、好奇心が旺盛であること、行動力があること、向上心があることといった自らの性格や気質について、中・長期留学との関連で語られた。

②　周囲の関係者の要因

・保護者等の海外経験・海外志向

親などの身近な家族が海外経験や、海外志向を持っている場合、留学への理解や支援が得られやすく、学生が渡航留学を希望する際にも精神面、経済面等での後押しが見られた。

・海外と繋がりのある友人・知人関係

海外志向・海外経験を有する身近な友人・知人を有していることも、大学以降の中・長期留学の希望に影響を与えていた。保護者などの身近な家族に海外経験を有する者がいない場合、特に、友人・知人の存在が、海外事情の入手や、留学志向を高める上で貴重な役割を果たしていた。

インタビューの分析からは、海外等での先行文献を中心に指摘されていた、自身の過去の海外経験や、海外志向を有する親族・友人・知人関係の存在が、中・長期留学に影響を与えたことが確認された。大学入学以前の段階において海外経験を積む上では、海外志向を持つ家族の存在が重要な要因となる一方、海外志向を持つ人々と繋がりを提供できる環境を、学校などの家族以外の場所で設けていくことも重要であることが示された。

本研究の成果として、質問紙とインタビュー調査の内容を総合的に検討すると、近年特に求められている大学からの中・長期留学の促進にあたっては、学生自身が研修という形での海外経験を事前に持つことが効果的であるということに加え、旅行等を含むその他の海外経験の保持、留学と関連のある興味や価値の認識、好奇心旺盛、行動力、向上心といった性格特性の保有、そして、海外志向や経験を持つ保護者、友人・知人の存在が影響を与えることが示された。これらの点を踏まえながら、今後の中・長期留学の促進に向けて、大学と、大学入学前の要因を効果的に組み合わせ、施策を行なっていくことが重要である。

＜引用文献＞

① Kuh, G. D. and O‘Donnell, K.（2003）*Ensuring Quality & Taking High-Impact Practices to Scale.* Washington, DC: AAC&U.
② 文部科学省（2018）「トビタテ！留学 JAPAN」PR 事務局 News Release.
③ 日本学生支援機構（2019）「平成 29 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」.
④ OECD（2018）Education at a Glance: OECD Indicators. Paris: OECD Publishing.
⑤ 新見有紀子（2022a）「国内学部在籍中の中・長期留学につながる大学入学前の経験―アンケートに基づく探索的分析」,『留学生教育』, 27 号, pp.85-93.
⑥ 新見有紀子（2022b）「学部在籍中の留学に影響を与える大学入学以前の経験とは－インタビュー調査に基づく考察」『日本国際教育学会第 33 回研究大会発表要旨集録』p.48-49.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Yukiko Shimmi, Hiroshi Ota, Akinari Hoshino	４．巻 107
２．論文標題 Internationalization of Japanese Universities in the COVID-19 Era	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Higher Education	６．最初と最後の頁 39-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新見有紀子	４．巻 27
２．論文標題 国内学部在籍中の中・長期留学につながる大学入学前の経験ーアンケート調査に基づく探索的分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 留学生教育	６．最初と最後の頁 85-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 新見有紀子
２．発表標題 高校卒業以降の半年以上の留学を規定する高校時代の異文化接触経験とは―アンケート結果を踏まえた探索的分析―
３．学会等名 異文化間教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 太田浩，星野晶成，新見有紀子
２．発表標題 ポストコロナに向けた国際教育交流 ―ICT を活用した新たな教育実践並びに国際教育交流の可能性と方向性を考える―
３．学会等名 日本比較教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 太田浩，星野晶成，新見有紀子
２．発表標題 新型コロナウイルス下での国際教育交流とICT：日本の大学における事例研究
３．学会等名 日本比較教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 新見有紀子
２．発表標題 学部在籍中の留学に影響を与える大学入学以前の経験とは―インタビュー調査に基づく考察―
３．学会等名 日本国際教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Akinari Hoshino, Hiroshi Ota, Yukiko Shimmi
２．発表標題 International Education with ICT During COVID-19 Pandemic: Japanese Universities' Experiences
３．学会等名 Asia-Pacific Association for International Education (APAIE)（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関